

記念館からのお知らせ

『しろばんば』の舞台であり、井上靖先生が幼少時代を過ごした伊豆・湯ヶ島では、毎年、先生を偲び、追悼事業が行われています。今年は、1月30日に行われ、当市からも学芸員がご招待を受け、参加してまいりました。

当日は、井上靖先生・ふみ夫人の墓参の後、「井上靖感想文コンクール」の入選作品発表・表彰式が行われ、午後から、「おろしや国酔夢譚」の映画上演会が開催されました。(当館で毎年夏に展示している衣装は、この映画の撮影に使われたものです!) 上映会の前に、学芸員が簡単な解説をさせていただきました。

井上先生の御遺族をはじめ、多くの方々が各地からご参加されており、地域の方々が一致団結してお迎えされている様子には、学ぶべきところが多々ありました。このような大きな事業を継続的に行われるには、御苦労も多いことだと思いますが、生き生きと楽しんで取り組まれており、顕彰活動の理想であると感じました。また、井上先生と関わりの深い方々から、「おろしや国酔夢譚」について沢山の貴重なお話をうかがうことができ、とても参考になりました。今後の館活動に活かして参りたいと思います。

吉村昭先生の奥様である津村節子先生から「吉村昭研究」第13号をご寄贈いただきました。古市充雄様によるレポート「伊勢と北海道」の中で、当館の特別展についてもご紹介いただいております。ありがとうございました。また、津村先生からは、北海道立文書館で行われた「吉村昭と北海道 歴史を旅する作家のまなざし」展の図録もご寄贈いただきました。

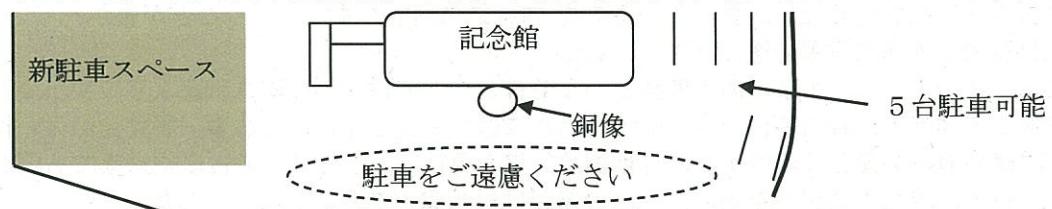
日本たばこ産業(JT)のホームページで小市の遺品(キセル)を御紹介いただいております。大槻玄沢著「薦録(えんろく)」の挿絵に小市の遺品のキセルが紹介されています。小市の遺品は、各地で公開され、様々な書物にそのスケッチが残されていますが、これもその一つです。ロシア渡りの小市の遺品が、当時の人びとの関心を集めた事がここからもわかります。なお、大槻玄沢は、若宮丸漂流者の漂流記である「環海異聞」を編さんする際に、光太夫からも直接話を聞いています。URLはこちら⇒<http://www.jti.co.jp/sstyle/trivia/know/episode/2011/03/index.html>

富岡昭様より井上靖先生の漂流記を題材にした作品をお教えいただきました。角川文庫『天目山の雲』に収載されている「漂流」です。残念ながら文庫版は絶版のようですが、井上靖小説全集15巻にも収載されておりますので、お近くの図書館などでお探しになってみてはいかがでしょうか。

駐車場が広くなりました

記念館に隣接する若松公民館の取り壊し工事が終了し、跡地が大黒屋光太夫記念館の駐車場として整備されました。今まで手狭な駐車場で、ご来館の皆様にご迷惑をおかけする事も多々ありました。今後は、旧公民館跡地にも駐車いただけますので、ご利用ください。

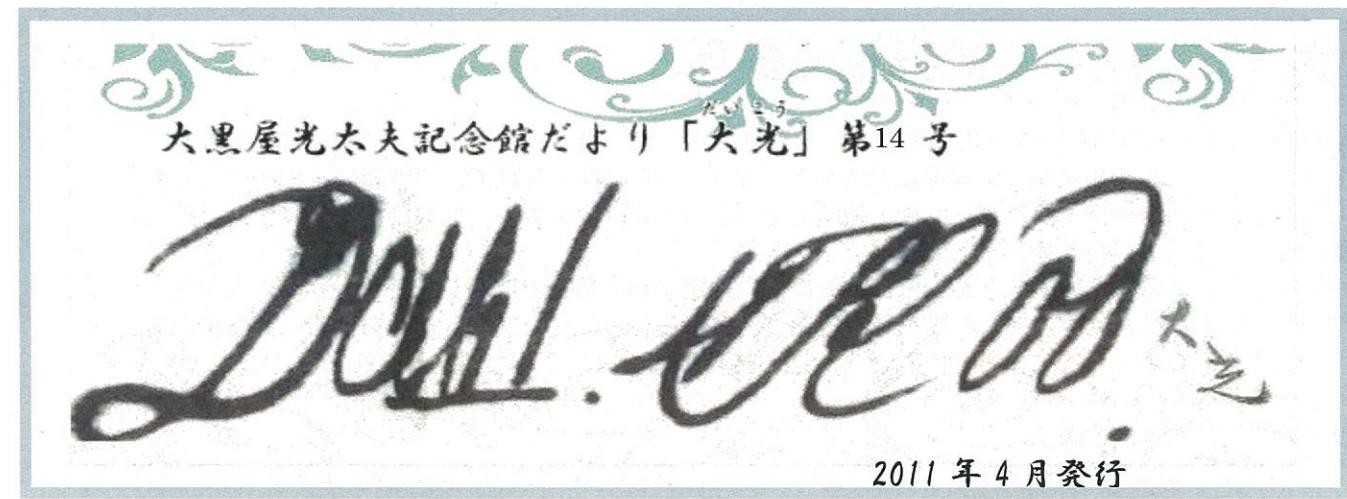
また、記念館前(光太夫の銅像前)の駐車スペースは、お車同士の接触事故等が数件報告されております。ご来館の皆様の安全のためにも、できるだけ記念館前の区画には駐車なさらず、他の駐車スペースにお回りください。



編集後記

3月11日に発生しました地震において、大きな被害に遭われたみなさま、ならびにご家族、ご友人の方々に心よりお見舞い申し上げます。鈴鹿市では、幸い大きな被害ではなく、文化財につきましても破損等の報告はありませんでした。しかしながら、東日本各地では、多数の文化財も被災しました。被災地には、開館以来お世話いただいた各館・関係者・所蔵者の方々も少なくありません。大黒屋光太夫関係資料および江戸期の漂流関係資料も、すくなく散見する地域です。今後も状況の把握に努めながら、微力でも我々にできることを考えていきたいと思います。

ところで、光太夫の漂流も暴風雨という自然現象のなせるものでしたが、自然の脅威を改めて思い知らされることになった今回の震災。光太夫の逆境に打ち勝つ精神力やリーダーシップのとり方は、現代の私たちにとっても学ぶところが大きいように思います。そのようなエピソードも今後ご紹介していくたらと思います。



小市の遺品 キセル2点



春の企画展「大黒屋光太夫のさとがえり」では、鈴鹿市指定文化財・大黒屋光太夫らの帰郷文書(「帰郷文書」と略)を公開します。

帰郷文書とは、昭和61年に鈴鹿市若松の倉庫から発見された南若松村文書のなかから、大黒屋光太夫・磯吉・小市に関するものを抽出し文化財指定されたものです。主な内容は、①光太夫らの帰郷から江戸での遭遇などに関するもの ②小市の遺品に関するもの ③磯吉の帰郷に関するもの ④大黒屋光太夫の帰郷に関するもの の4つに分類できます。今回の企画展では、この4つの分類に沿って展示しております。

帰郷文書の発見によって、故郷の土を踏めなかったと考えられていた光太夫が、実は帰郷を許されていたという事実が明らかになりました。一見すると古文書ばかりが並んだ地味な展示ですが、地元鈴鹿にとって、とても大事な古文書たちです。是非、「帰郷文書の世界」を堪能して下さい。

光太夫の伊勢参り

大黒屋光太夫は、帰国から10年後に里がえりを許されました。光太夫は、里帰りに際して伊勢神宮にも参詣したいと幕府に願い出ており、鈴鹿に到着すると早々に10日程の日程で、伊勢詣でに出かけました。参詣したのは、両伊勢神宮・伊雑宮・二見・朝熊山金剛證寺・青峰山正福寺・丸興山庫藏寺です。村役人の喜右衛門と甥の彦太夫が付き添いました。

江戸時代、この地方の廻船のほとんどは、伊勢神宮の神棚を船に積んで航海していました。光太夫たちが乗っていた神昌丸にも、伊勢神宮の神棚が積んであり、光太夫たちはロシアでもそれを大切に持ち歩いていました。光太夫の口述を中心にまとめられた「北槎聞略」には、次のような記述があります。

●漂流中の海上で…

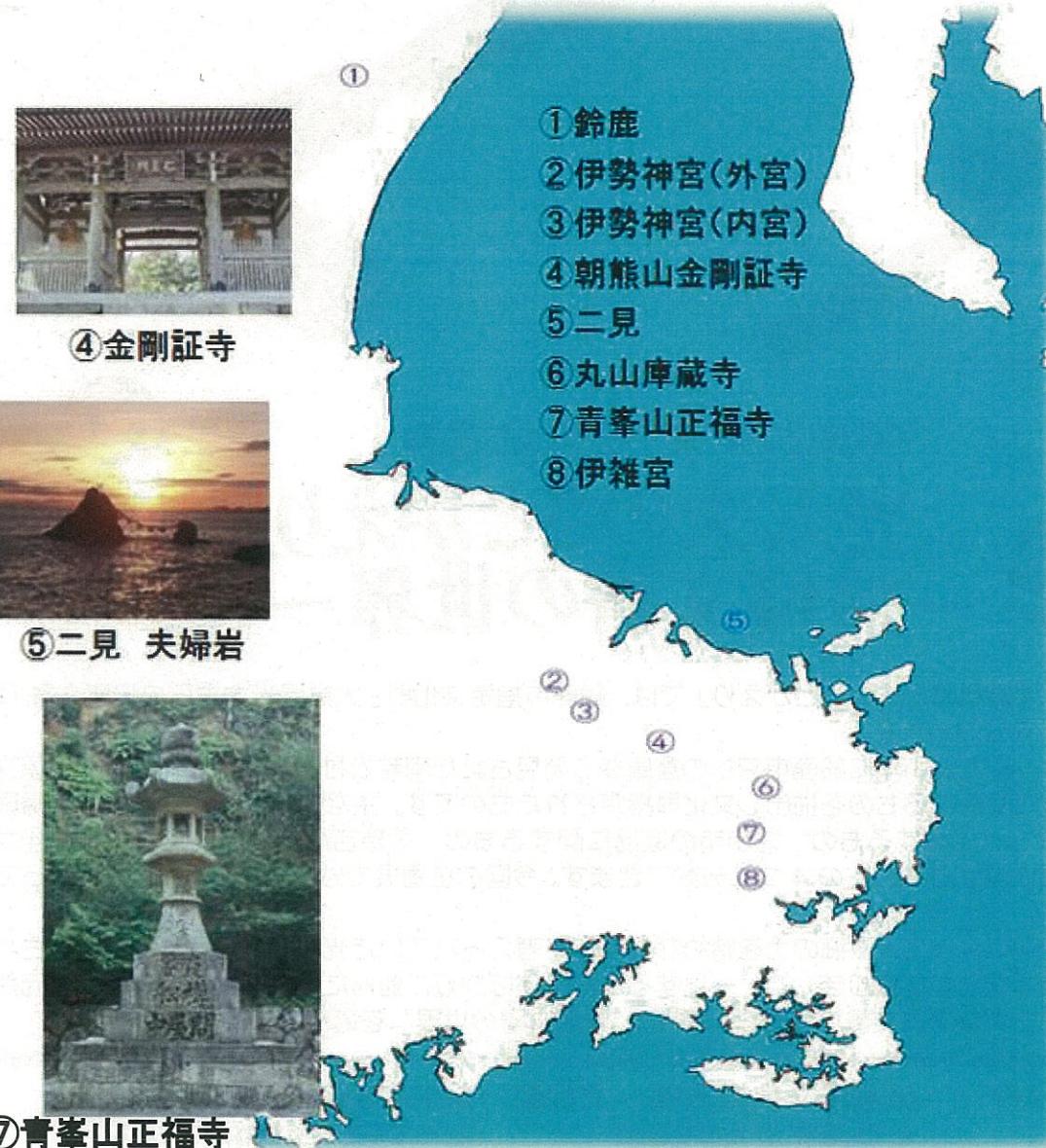
「このように海上に漂っては、いつ死ぬか、どこに着くかもわからないので、太神宮（伊勢神宮）のおつげで陸との距離を測ろうということになり、みくじを引いたところ、二回とも六百里と出たので船中の者は一同に色を失いました」

●漂流後辿りついたアリューシャン列島のアムチトカ島で…

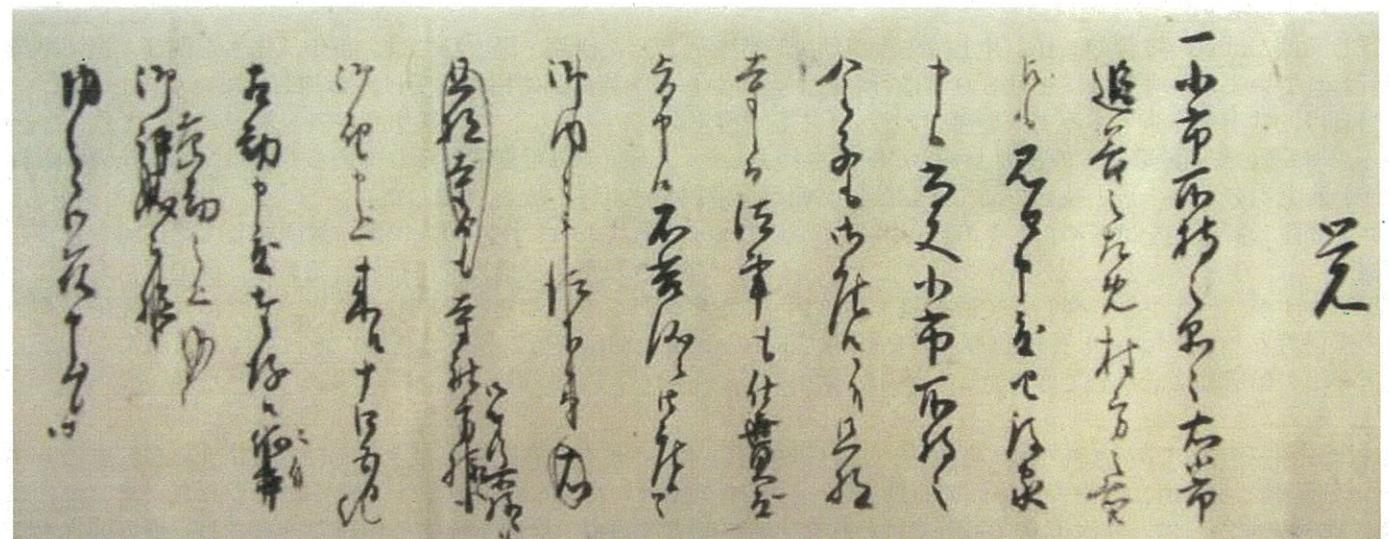
「夜になると磯辺の岩屋に入り、伊勢神宮の神棚を小高いところに安置してから眠りにつきました」

船乗たちは、難船してからも伊勢神宮の神棚を大切にしており、伊勢神宮への信仰は厚いものがありました。光太夫が、十年ぶりの帰郷の際に、伊勢神宮への参詣をとくに願い出た背景には、このような船乗りの厚い信仰がありました。

また、光太夫は、1ヶ月の帰郷を終えた後、関の地蔵院に立ち寄り、江戸へと旅立っています。



収蔵資料の紹介



現在残る小市の遺品

この資料は、小市の遺品を巡る古文書の一つです。小市の遺品の披露をするために、村役人が書いた伺書の下書きです。持ち主である後家（けん）が、小市の追善のために村人へ遺品を見せたいと言っているので、内々にお伺いしますということが書かれています。校正の跡から、村役人が入念に言葉を選んだことがわかります。

小市の遺品は、このように、小市の追善供養という名目のもとで村人に披露されたようです。最初は、小市の菩提寺である宝祥寺で、若松の村人へ公開するために追善供養と銘打った法事・展覧会が行われましたが、やがて、同様の追善供養とは名ばかりの見世物は、津や四日市、さらには名古屋や京都でも開かれようになります。村では遺品の貸出料を定め、小市の遺品は村を潤すことになりました。

江戸時代は、外国の情報を公開する事などできなかったと思われがちですが、実は、このように名目さえ整えば、外国渡りの品物を見世物とすることも可能でした。

22年度報告

- ★データ 入館者数…4829人 開館日数…252日 平均入館者数…約19人／日
- ★展示活動 春の企画展「光太夫の里がえり」・夏の企画展「知っておどろき！大黒屋光太夫！！」
開館5周年記念展「海のむこうへのあこがれ—漂流記と漂流文学—」・冬の企画展「光太夫とロシア文字」
- ★印刷物 開館5周年記念展図録／大黒屋光太夫記念館だより「大光」10～13号／子ども用ワークシート
- ★その他事業 11/14 開館5周年記念事業 バラライカミニコンサート&「おろしや国酔夢譚」「大黒屋光太夫」朗読会

一 覚
小市所持の品々右市
えも見セ申度由後家
申候尚又小市所持之
寺ニ而法事も仕貢度
旨申候不苦儀ニ御座候ハバ
申候尚又小市所持之
金子も御座候ニ付且那
追善之ため村方之者
申候尚又小市所持之
御届申上來ル十四五日頃
相勤申度奉存候仰奉行所様え
御許儀被遊候考許之段勘之上
内々御窺申候以上